

ピラन्दロの町アグリジエントを訪ねて（山口）

## ピラन्दロの町アグリジエントを訪ねて

山口 清

ピラन्दロの生涯はアグリジエントに始まりローマに終わっている。詩、小説、劇、エッセイにわたる彼の特色ある作品はイタリア文学の異彩であり、またその光栄を増したと言ふことが出来よう。或る批評家は彼をダンテと比較した。それはダンテの価値を低くする為の比較ではなく、ピラन्दロの価値を高くする為の比較であった。ただピラन्दロは地獄のみを描いて、煉獄や天国を描かなかった。彼の世界は苦悩にみちた世界であった。彼は人類が過去に築いた文明を誤謬の文明と考え、新らしき人類の文明の再建が必要であると思った。戦い殺し合う文明は人類を滅亡に運命づける。晩年の未完の作品「アダモとエヴァ」の中で彼はこのような問題と取り組んでいた。ギリシャ語から来ているピラन्दロと言う名は「火の天使」或は「火を告げる者」を意味しているが、人類が原爆の劫火による滅亡の脅威にさらされている今日、ピラन्दロの名は何か魔的なひびきを我々の耳につたえる。

ピラन्दロの世界が苦悩にみちた世界であったにもかかわらず、彼に取っては暗雲の切れ間からのぞかれる青空のようなものが一つあった。それは彼の故郷アグリジエントに対する愛であった。アグリジエントの方言に対する愛も並々ではなかった。或る時彼は「アグリジエントの言葉は世界中で一番美しい言葉である。若しも私に権力があつたらイタリアのすべての学校でアグリジエントの言葉を教授させるであらう。アグリジエントの言葉を方言と呼ぶのは不当である。」と語ったことがある。彼はローマとボンで大学生活を送ったが、彼がボン大学に提出した卒業論文はアグリジエントの方言に関する言語学的な研究であった。作家としての彼が作品の題材の多くをアグリジエントから取ったのは言うまでもない。彼の遺言の中には故郷に帰りたい希望が書きのこされていた。彼が死んでから十年たった一九四六年彼の遺骨がローマからアグリジエントへ移されたのはその為である。

私はそのようなアグリジェントを見ることによって、もう一度ピランデルロの世界を見直したいと思っていた。だから私のローマ滞在中の最も大きな関心は、どのようにして最も効果的にアグリジェントへの旅行を用意するかであった。

私はローマの郊外のグロッタフェルラータに住むステファノ・ランディ・ピランデルロ（ルイジ・ピランデルロの長男）に手紙を出して会見を求め、最初はローマにある彼の顧問弁護士の事務所で、二回目はグロッタフェルラータで彼に逢った。彼はおだやかな人柄であったが、どこかに憂うつ影がつきまとうているように見えた。彼はクロッチェが遂にピランデルロを理解し得なかったことを嘆いていた。我々は色々な話題について話をしたが、アグリジェントについて彼が語ったところでは、ピランデルロが生れた家は種々の不利な事情の為に今だに修復されていない様子であった。

次に私はアグリジェントの博物館長に手紙を出して、館内に収めてあるピランデルロに関係ある物のリストを求めた。それに対して館長のジレッタ氏から返事が送られ、館内にはピランデルロの遺骨を容れた古代ギリシャの壺とピランデルロ文庫とがあることを知った。アグリジェントへの旅行の時期は三月の中旬を選んだ。それはイタリアでマンドルリが花を咲かせる時期だったからである。ローマを出発して途中ナポリに一泊、汽車で半島を南下、レッジョ、メッ

ピランデルロの町アグリジェントを訪ねて（山口）

シナを経てシチリアに入り、タオルミーナに一泊、カタニアに一泊、シチリア中部の町カルタニセッタを経て三月十五日の午頃目的地のアグリジェントに着いた。

私は終着駅のアグリジェント・チェントラーレで下車し、昼食を取る為に駅のレストランに入った。シチリアの駅のレストランは客も少なくのんびりしている。面白いことにはレストランの給仕も、またその主人も日本人によく似た顔であった。シチリアには大分東洋の血が入りこんでいるのだなと思った。私が給仕に博物館のジレッタ氏に逢いたいのだがと話す、彼は気をきかせて使いの少年をすすましてから、山上にあるアグリジェントの町に宿をさがし、そこで旅装をといたのち博物館に向った。途中道ばたの靴磨きに前夜カタニアの雨でよごれた靴をみがかせた。私が腰をおろして靴を磨き台の上ののせていると、異邦人の私が珍らしいと見えて、通行人が私の周囲に立ちどまって私をながめ、私に話しかけた。そのうちの一人は老人で若い頃船乗りであったと言い、日本のヨコハマを知っていた。他の一人は色の浅黒い労働者風の中年の男で、靴磨きが終ってから私を博物館まで案内してくれた。案内のお礼として私に彼にシガレットを二本やろうとしたら遠慮して受取ろうとしない。それでは一本でも火をつけなさいと言ってマッチをすったら喜んで

ピランデルロの町アグリジェントを訪ねて（山口）

受けとった。イタリアではシガレットをバラでも売っている。貧乏な学生がタバコ屋でシガレットを一本だけ買うのを見たことがある。だからイタリアでシガレットを一本本人にお礼としてやることもそんなにおかしいことではない。

館長のジレッタ氏は小柄で、これもまた日本人によく似た顔の人であった。青いベレー帽をかむっていた。既に私は彼と二回ほど手紙で連絡をとっていたので、彼は私の来訪の目的をよく知っていたし、旧知を迎えるように温い手をさしのべて私を迎えてくれた。

博物館はアグリジェントの山の南西の斜面に立っていて、窓からは古代神殿の廢墟のある丘陵、それにつらなる緑野、そのまた彼方には海が一望のもとに見おろされた。この一帯はその昔ギリシヤの詩人ピンダルが「人間の都市のうち最も美しい都市」とほめたたえた古代ギリシヤ人の都市アクラガスの跡である。ジレッタ氏は緑野の中にかすかに見える一本の高い木を指しながら言った、「あの松の木のあるところがカオスです。ピランデルロの生れた家はあのすぐ側です。明朝あなたをそこへ案内しましょう。」

博物館にはアグリジェントで発掘された古代ギリシヤ、古代ローマの彫刻や貨幣や器具などが主として取められていたが、現代のものも取められている部屋も一つあった。ピランデルロ文庫とピランデルロの遺骨を容れた古代ギリシヤの壺はその部屋の中に置かれて

いた。またこの部屋の壁には現代の画家の油絵が幾点かかけられていた。その一つは聖女アガタを描いたものであった。教会が聖としたカンポ・サントに葬られることを拒否して古代ギリシヤの壺の中に眠るピランデルロと、教会が列聖したアガタとのコントラストがきびしく目立った。

私はその日の日没までの残る三時間ばかりを古代神殿の見物に過ぎた。古代神殿の廢墟がならんでいる丘陵は山上にあるアグリジェントの町を北に見あげ、海を南に見わたす位置にある。アグリジェントの町とこの丘陵の間の谷は一面マンドルリの畑であるが、シチリアの春はイタリア半島の春よりも早く、既にマンドルリの花は大部分散っていて、僅かにここかしこ、おくれ咲きのマンドルリが可憐な花を残しているに過ぎなかった。アグリジェントでマンドルリの花盛りは二月と言うことであった。

夕陽を浴びて長い影を地上に投げている古代神殿の石柱の側に腰をおろしていると、丘陵の麓から一人の老人がのぼって来て私に挨拶した。彼は帰りの馬車を道にとどめて来た御者で、アグリジェントまで馬車で帰るように私を誘いに来たことが分った。私は彼の誘いに応じて馬車で帰ったが、話好きの御者はオリブの老木を指しながら、こんな老木は「オリブ・セコラーレ」と呼ばれるとか、また石切場の側を通る時には、古代神殿の石材はその石切場の石と

同じで、とても丈夫な石であるとか色々なことを話した。馬車がアグリジエント駅前の広場に着いた時にはあたりはもうすっかり暮色に包まれていた。

三月十六日、アグリジエントの朝は意外に賑やかであった。小さな通りは人でいっぱいであった。白い兎をぶらさげながら「コニーリ、コニーリ」と呼んでいる男や、オレンジを馬車一ぱい積んで町の店におろしに来た農夫の姿も見えた。アグリジエントでオレンジの値段はローマでよりもうんと安い。果物店にはビワも出ていた。日本よりも二カ月も早い。然し実は小さい。大きな実のビワは「日本のビワ」(nespole giapponese)と呼ばれると聞いた。

私は約束の時刻にジレットタ氏を博物館に訪ねた。そして一緒にアグリジエント郊外のカオスに出かけた。ポルト・エンペドクレ行きバスに乗って約十分、それから畑の間の小道を少し歩いてカオスについた。海に面した断崖のある高原である。そこにただ一軒、石をつんで漆喰でかためた壁の二階建ての粗末な家があった。家のまわりにはフィコ・ディンディアやオリブの老木があり、また一〇メートルばかりはなれた位置には一本の高い松があった。この家がピランデルロ誕生の家である。国の記念館としての修復工事がようやく開始されたと見えて、五六人の人夫が仕事に来ていて、石を片付けたり、土を運んだりしていた。ジレットタ氏も関係者の一人で

ピランデルロの町アグリジエントを訪ねて(山口)

あるらしく、人夫たちに指図や注意を与えていた。ピランデルロ記念館が完成したら、博物館に置いてある記念文庫やギリシヤの壺もここに移される予定であるとジレットタ氏は語った。

カオスの家はピランデルロの母ドンナ・カテリーナの実家、即ちリッチ・グラミット家の所有であったが、ピランデルロに取っては自分の誕生の家として終生忘れることの出来ない場所であった。

「帰郷」と題する彼のソネットはカオスへの郷愁の詩である。

荒いアフリカの海が泡の熱気を

低く送る青粘土の高原の上の

風わたるふるさとの野の

はなれ家よ

私の人生が大きく、うつろな世の中へ、

小さく開かれた瞬間を思う時、

私は何時も遠くから汝を見る。

ここから私は人生の路に就いたので。

オリブの樹々の間の、薄荷とサルビヤに香る

この細道から私は世の中へ出発した、

何も知ることなく、何も恐れることなく。

さびしい生垣の間のつつましい小さな花たちよ、

あざむかれ、疲れ果てたわが身を

汝等のもとへ連れもどす為

私はどれほど多く歩いたことであろう。

mente mettendo in luce la contraddizione tra le “morali” e i contenuti delle novelle del Decameron, noi arriviamo alla conclusione che la struttura è realistica. La Vita Nuova si può dividere in tre parti: la parte della tendenza dominante della prosa, l'altra della lirica, e la terza del miscuglio di questi due elementi. Analizzando la struttura dove si trova il miscuglio, arriviamo a una conclusione differente dall'opinione del De Sanctis, cioè che in questa opera si osserva il carattere narrativo come dominante, e poi un nuovo metodo di analisi psichico.

## La mia visita ad Agrigento, la città di Pirandello”

Kiyoshi Yamaguchi

Il Prof. Kiyoshi Yamaguchi, dell'Università di Nagasaki, che ha studiato specialmente il Pirandello durante la sua permanenza in Italia dal 1954 fino al 1955 andò a visitare Agrigento, la città dello scrittore e ha scritto un interessante diario del suo viaggio nel quale egli parla della vita di Pirandello e della sua nostalgia per il paese natale e per il suo dialetto, Alla fine dell'articolo il Yamaguchi traduce una poesia di Pirandello, “Ritorno”.